

# 備える。

準備。予備。整備。装備。守備。警備。  
 そなえる…用意する、そろえる、用心する  
 防備。常備。完備。不備。具備。兼備。  
 そなえ…したたく、用意。警戒。防衛  
 備品。設備。備蓄。備員。備考。備忘。  
 そなわる…準備ができる、身に付く  
 ●●●ソナエ アレバ ウレイナシク

no. **31**

かわさき  
**防災広報紙**

昭和62年2月28日発行  
 発行●川崎市  
 編集●土木局防災対策室  
 〒210 川崎市川崎区宮本町1番地  
 TEL.(044)200-2111内線2841



## お知らせ します。

## 〈防災行政無線〉 運用開始!

各地から花の便りもときはじめ、春も、もうすぐそこに！ 入学、卒業や就職の季節：春。街に、小学一年生のかわいい姿が見られるのも間近です。新しく学校や会社に通い始める人も、転勤その他で初めて川崎に来られた人も、新しい出発のときをむかえて、「希望」に胸をふくらませていることでしょう。

川崎市では、本年4月から、3年をかけて整備してきました〈防災行政無線〉が、新たに運用を開始します。

これまでの無線は、一部電波の届きにくい地域があるなど、必ずしも「円滑な情報伝達」ができませんでした。また市民の皆さんに直接情報が伝えられないことも災害対策のうえで大きな障害でした。

今後、これらの問題が解消され、川崎市のめざす「災害に強い街づくり」に向かって、情報面からも、大きな前進をとげることによって、「安心して暮らせる住みよい街」にするため、市民の皆さんとともに、一層努力していきたいと思っております。

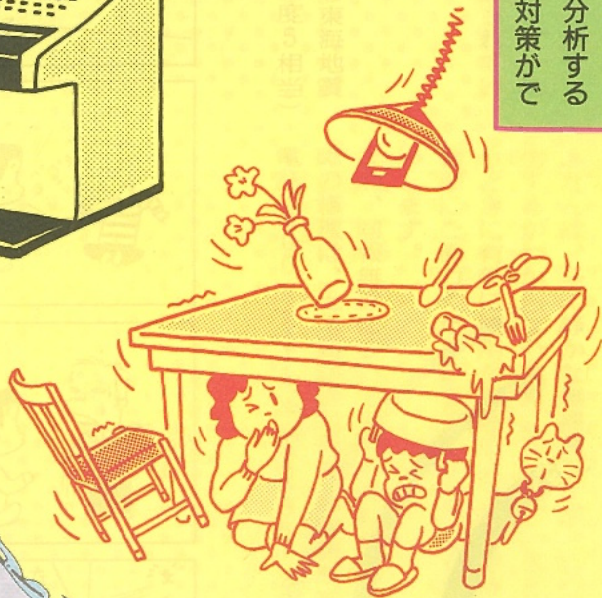
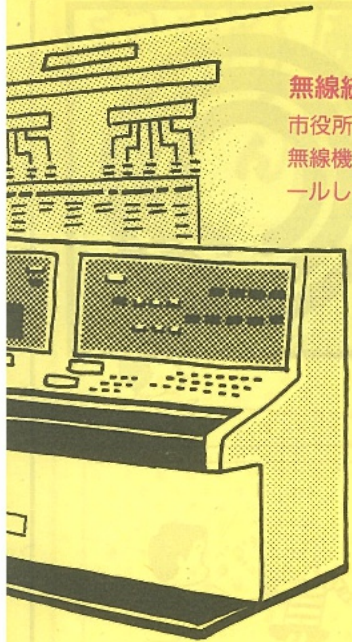
今回の『備える。』は、〈防災行政無線〉を紹介いたします。

# 〈防災行政無線〉のしくみ

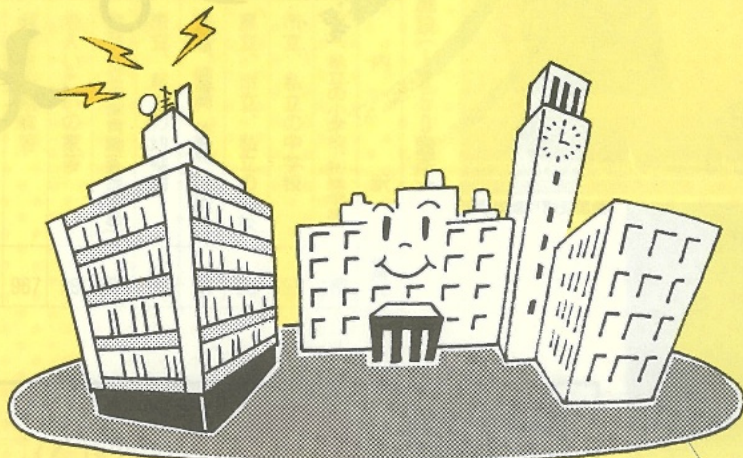
大地震や風水害などの災害が起こったとき、応急活動や救援救護活動に万全を期するため、市の各施設と防災関係機関が、互いに円滑な情報伝達を行えるのが、〈川崎市防災行政無線〉で、24時間体制をとり、次のような特色があります。

- 1 市役所や区役所を中心とする市の施設と防災関係機関が相互に、ダイヤル一つで即時に通話やファクシミリ通信ができます。
- 2 移動系の無線（可搬型、車載型、携帯型）は、市役所と各区役所が使用する電波を分離し、混信を防ぐとともに区内はそれぞれ独自の通信が可能となり、直接関係のない通信は、聞こえないようになっていきます。
- 3 市役所や区役所が「放送局」となり、地域の学校、幼稚園等の施設、避難場所、住民組織に、同報無線を使って、災害情報を広報できます。
- 4 雨量や水位などのデータをテレメータ無線により集中把握し、分析することによって、適切な災害対策ができます。

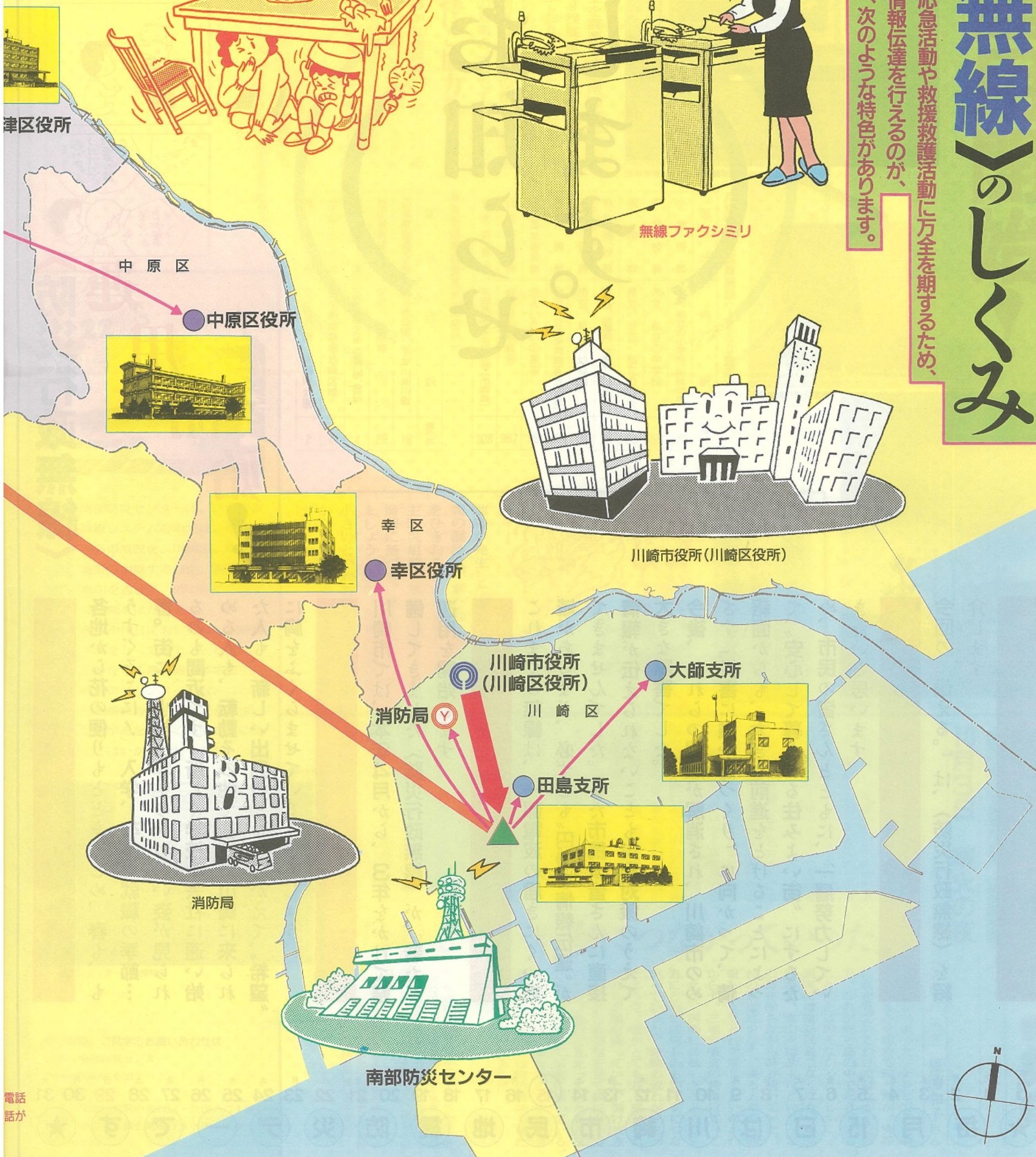
**無線統制台**  
市役所の統制室におかれ、各無線機の動作状況をコントロールします。



無線ファクシミリ



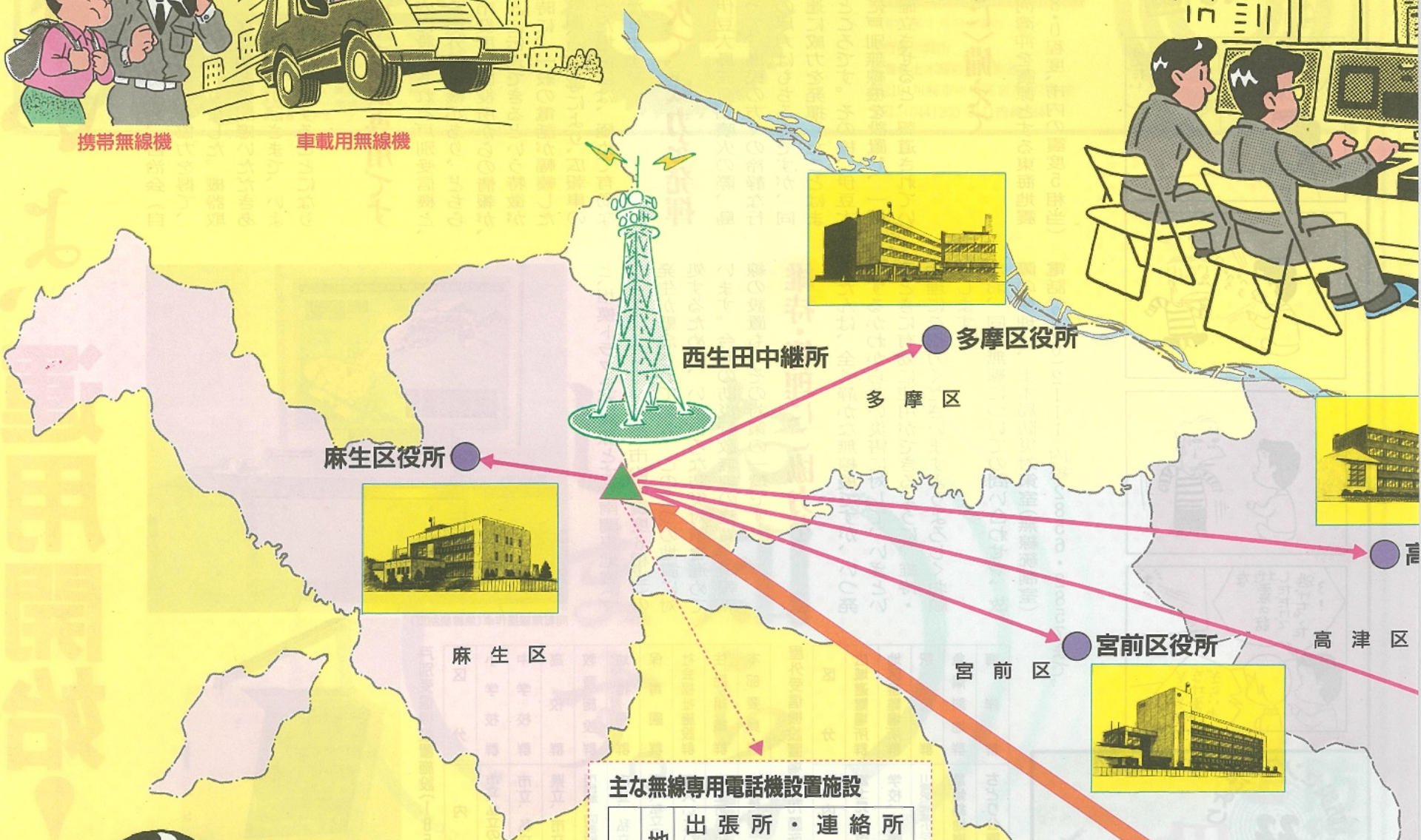
川崎市役所(川崎区役所)





携帯無線機

車載用無線機



同報無線戸別受信機  
市民の皆さんに市役所、区役所の情報が直接伝達できます。

主な無線専用電話機設置施設

市の施設	出張所・連絡所
	土木事務所
	消防署
	保健所
	清掃事務所
	市場・競輪場
	病院
	下水管理事務所
	港務所
	長沢浄水場
防災関係機関	バス営業所
	警察署
	NTT川崎電報電話局
	東京電力
	東京ガス
	放送関係機関
	川崎市医師会
	国鉄・京急川崎駅
その他	川崎海上保安署
	建設業協会・重機組合 トラック協会川崎支部



無線専用電話機  
市の施設や防災関係機関に設置され、一般の電話が、不通になっても使用できます。



内線電話機  
市役所、区役所等の内機から無線を利用してできます。

# いよいよ、運用開始!

同報無線戸別受信機は、町内会、自治会(自主防災組織)の役員の方々のご協力を得て、昨年10月から設置してまいりました。機器取り付けの際には、なにかとご配慮いただきありがとうございました。おかげさまで、いよいよ本年4月から運用を開始することになりました。

## 同報無線は、受信専用です

同報無線は、室内に設置される戸別受信機と、屋外に設置される屋外受信機があり、どちらも受信専用で、市役所、区役所からの情報、直接市民の皆さんに伝達できるという特徴があります。災害時に、一般の電話が輻輳した場合や、道路の破損、混雑等により、広報車の走行が困難になった場合には、極めて有効な情報伝達手段となります。

## 三原山噴火で、威力を発揮

昨年11月21日の伊豆大島三原山噴火の際、島民の避難にあたって、島民の方々の冷静な行動や、関係機関の尽力はもろいですが、同報無線が情報伝達に威力を発揮したことはまだ記憶に新しいところです。その後、伊豆大島島民の全世帯に戸別無線機を設置し、一層完璧な情報網を確立させると、報道されています。

## へそのときに備えて

川崎市では、駿河湾沖を震源とする東海地震(マグニチュード8.0程度、市内の震度5相当)



同報無線操作卓(無線統制室)



同報無線戸別受信機



同報無線屋外受信機(新城小学校)

区分	内訳	箇所数
小学校群	市立私立の小学校、特殊学校	122
中学校群	市立、私立の中学校	57
高校群	県立、市立、私立の高校	28
教育施設群	市民館、図書館、体育館、民家等	23
幼稚園群	市立、私立の幼稚園	115
保育園群	市立、私立の保育園(乳児院含む)	132
社会福祉施設群	老人いこいの家等	98
住民組織群	自主防災組織等	967
本部要員群	本部長、地区本部長等(市職員)	308

と、相模トラフ上を震源とする南関東地震(マグニチュード7.9程度、市内の震度6相当)の発生が懸念されており、この二つの地震に対処するために、いろいろな防災対策を進めています。今回の防災無線の整備、同報無線の設置も、その対策の一環です。

## 維持・管理にご協力を

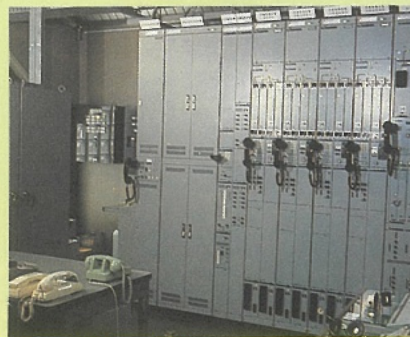
ふだんは、全く静かな無線機ですが、いつ発生するかかわからない災害に対して、いざというときに有効に使用ができるように、維持・管理にご協力ください。よろしくお願いいたします。

なお、同報無線についての問い合わせや、故障の修理は、土木局防災対策室(無線統制室) 電話(200)2111 内線2856・2857まで。



### 「防災の前線基地」

南部防災センターは、防災行政無線システムの中では、市役所からの電波を、川崎区、幸区の施設に中継するほか、西生田中継所を通して、他の区に中継する役割をはたします。夜間や休日においては、24時間体制をとっており、いわば市の安全を守る最前線の基地です。南部防災センターでは、これらの無線機器の見学ができます。防災学習をかねて一度ご覧になってはいかがでしょうか。



南部防災センター通信機室

●ご利用、ご見学のお問い合わせは  
川崎市南部防災センター  
川崎市川崎区小田7-3-1  
TEL 355-2175  
交通=国鉄川崎駅中央口14・21出入口1番のりば 臨港バス富士電機行き小田小学校前下車徒歩6分



### 地震の心得 レッスン③

#### 「正しい情報をつかみ、余震を恐れるな」

地震が発生したあと、デマなど情報の混乱は、新たな人為的な事故をひきおこしかねません。市、自主防災組織、放送機関等の正確な情報に基づき、落ち着いて行動しましょう。また、余震は本震より小さいといわれています。ふだんから、地震の正しい知識を身につけましょう。

帰宅すると母たちは避難の準備を始めていた。用意する物ばかりからいたのだが、興奮のあまりどれから手を付けていいかわからなかった。その間にも不気味な地震は続いていた。取りあえず私たちは、学校で待機している妹と、消防団のために出勤している父を除き、隣の鉄筋の家へ避難した。鉄筋のため揺れが少なく、近所の人たちもそろっていたので安心はできたが、大人たちの顔がこわばっていたので、緊張はほぐれなかった。

## 「何もかもが不安につながっていった」

昭和58年10月3日15時23分頃、三宅島噴火。住家全壊330世帯、被害総額255億円。同日15時40分、同報無線で全島民に、サイレンのあと次のように情報が伝達された。  
「三宅島噴火発生のお知らせです。また、噴火が発生した模様です。市民の皆さんは安全な場所に待機して下さい」

「ウーウー」。雄山付近で噴火した模様です。という緊急の放送を聞いたのは、下校途中のバスの中であった。だれも信じられないという驚きの声を上げ、小さな子供は、何が起きたのかとよんとした顔をしていた。  
その約3分後、私たちは本当に噴火があったことを認めないわけにはいかなかった。走っているバスの上で、火山砕けがバラバラと音をたてて降ってきたのだ。窓の外では、雨のように勢いよく、やむことを知らないかのような火山砕けが、水色の空から降っていた。全く信じられない光景であった。  
帰宅すると母たちは避難の準備を始めていた。用意する物ばかりからいたのだが、興奮のあまりどれから手を付けていいかわからなかった。その間にも不気味な地震は続いていた。取りあえず私たちは、学校で待機している妹と、消防団のために出勤している父を除き、隣の鉄筋の家へ避難した。鉄筋のため揺れが少なく、近所の人たちもそろっていたので安心はできたが、大人たちの顔がこわばっていたので、緊張はほぐれなかった。

### 体験談 その31

#### 昭和58年三宅島噴火災害(東京都提供)

#### 10月3日 噴火の夜

都立三宅高等学校普通科3年(当時) 松浦和子さん

「びっくりであった。テレビで見ると火の大きさを初めて知ったが、実際に火を見ては驚きではなかった。これが同じ島の中で起きていることだとは思えなかった。しかし、現実には電話は通じなくなり、電気も消え、火山灰はサーッと一一定の音を保ちながら降り続いていた。村の放送は少なく、来る人たちの情報も様々でどれを信じてよいかわからず、三宅の噴火の特徴は知っていたが、実際に体験したことのない者にとっては何もかもが不安につながっていった。時間の流れが止まったようで、夜がとて長く感じられた。何もかもが不安につながっていった。開け放された窓から東の空を見て横になっていたら、あの日も深く印象に残っている。あの星たちは、私たちの不安や驚きも、宇宙にとっては何の意味も持たないと言っているようだ。(以下略)